

# MASセミナー 第14回

## 「心を紡ぐ建築」

2014.02.08 (土) PM 2:00 ~  
JIA建築家クラブにて



建築家 中山 隆一



日本建築家協会 関東甲信越支部 港地域会

### 成長を刻む柱

かつての住まいには心を紡ぐものが確かにあった様に思う。決してりっぱではないが節のある柱には親しみを感じ、またそのものに生命すら感じるがあった。そこでの暮らしにはごくあたりまえの人と建築の一体感があった。  
現代の住宅の材料は触れても何も語ってはくれないばかりか、大部分がフェイク(偽物)材だから当然だが、時の経過の中でみずぼらしくなってゆくだけであろう。家族の成長を柱に刻むような家づくりをもう一度出来ないのか？  
我々建築家に出来る事を問う  
難しいテーマである。



今井 均

### ヨーロッパで改めて教えられた 日本住宅の魅力

外国生活(ミラノ)が長かったので、石畳の床、モルタル壁やレンガ壁、小さい窓しかない空間に嫌でも慣らされてきました。こういう空間にいて、やはり心が内向きに締め付けられるような感覚にとられるようで、中近世を生き抜いてきた民族のメンタルが思いやられるような日々でした。そのためにでしょうか、「やっぱり俺は日本人だ」という思いも日増しに強くなって、日本にいたときは気にもしていなかった吉村順三の住宅設計図を取り寄せてみたりして、「あまりにも開放的で自然に近い日本住宅」のよさを思わずにいらませんでした。そのころから、風が通り、陽光が差し込み、軒先と雨の微妙な絡みがあり、内にも外にも自然が宿る日本住宅の魅力を出来るだけ活かしたいと思うようになりました。



大倉 富美雄

### 建築に求められるころの豊かさ

20世紀来、西欧に追いつけ追い越せ社会、そして第二次大戦からの復興を含め、私たちはひたすらものの豊かさを追い続けて来ました。そしてそれを十分に成し遂げた現代においても同じ路線を走り続けています。でも、ものの豊かさ、ころの豊かさが平行線でない事は毎日の新聞記事ひとつ見ても明らかです。ころの豊かさは、結果としての豊かなものから得られるのではなく、豊かさを求めて努力する行為そのものの中でこそ見いだすものだと思います。物足りてころ貧しき国、と言われてはいけません。



鈴木 理巳

### 「家」という建築の意味

「心を紡ぐ建築」というテーマを読んだとき、そうだ、「家」というのは本来そういうものかもしれない、と思いました。  
商業や公共建築、オフィスビルといった、華やかさや経済合理性といった強い目的意識を具体化した建築とは異なり、家は生活の器であり、私的空間として休息し、生命の根本、弱いものを受容し、育む場所でもあります。そのような空間が「心をつむぐ」という意図をもって作ることは、建築家としての夢であり職能の一部かと思えます。



田口 知子



### 木の空間で紡ぐ

学校が変わってきた。  
戦後のコンクリートBOXから脱却し、内部に木を用いた空間が増えてきた。本物の木があると、子どもは顔をすりよせて、香りや暖かさを感じている。ボードや塗装では味わえない感触を子どもの鋭い嗅覚で嗅ぎまわっている。そこには日本人が大切にしていた何かが存在する。  
木で紡ぐ心を大切にしたい。



宮田 多津夫



### 心を紡ぐ建築

建築空間は日常では意識しなくとも、時に心の心象風景に刻み込まれます。家族の肖像に寄り添う場面、学び舎における青春の記憶、人生における冠婚葬祭、藝術に浸る空間、小さな憩いの空間…  
建築家は大切な時を丁寧に支える設らいを創ります。それは四季折々の光や風を受けとめる仕掛けなど、様々な小さな工夫の積層からなります。  
今回のMASセミナーでは私たちの隠し味をそっとうご紹介したいと思います。



村上 晶子

### 心と対話する建築

建築は人を癒し、元気にする力があると思います。このためには、利用者の心と何らかの形で建築空間がそれに応えている必要があると考えます。  
心理学からヒントを得たコラージュを用いる設計方法もその1つだと思います。



連 健夫  
(むらじ たけお)